永久の誓言

楠木憂姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永久の誓言

【Ｎコード】
Ｎ３３０７ＢＡ

【作者名】
楠木憂姫

【あらすじ】
『キレイな月だね』

闇夜を照らす月華…

その美しき光に導かれるままに…

解き放たれる闇の渦…

ー無愛想で不器用な一途の想い…ー

『俺が一緒にいたいと思うお前は変わらずここにいるだろ？』

ー悲しみと憎悪の落雷…ー

『お前に会って、ただ…俺が生まれてきた価値を示してほしかったんだ…』

ー凍りついた人形…ー

『僕が僕であること…許してくれる？』

ー狂気に染まる笑み…ー

『好きだよ？殺したいくらい』

ー月華を慈しむ瞳…ー

『この体で…胸で…腕で…その想いを持って…彼女を抱ける君が…』

闇の中にそれぞれが忘れてきた感情…

取り戻した先に彼らが見るものは…？

光と闇の因縁ラブファンタジーここに邂逅…

開眼の刻

真っ暗な闇…

暗闇に消えた記憶…

あたしには何もない

何も残ってない

あたしはダレ？

ここはドコ？

蘇ることのない記憶…

あたしは見た

その闇に消えた記憶の中に

微かに輝く光

闇に飲み込まれない光

その光にあたしは手をのばした

温かい光

優しい光

その先にあったのは

月華に照らされた

たったひとつのあたしの居場所

『…時は満ちた』

―あなたは誰？―

『目覚めるのだ…』

ドクン…

跳び跳ねた鼓動とともに少女は目を覚ました。

「また…この夢…」

少女はさっき見ていた夢のことを考えながら時計を見た。

「１０時２０分…。…。ち…遅刻だー！！」

少女の名前は望月莉央（もちづきりお）。高校１年生。
容姿は中の上くらいだが、その他の頭脳や運動神経などはゼロに等しい女の子。

「ぐすっ…ぐすん…」

昼食時間。莉央は食堂で泣いていた。

「だって、先生ヒドイんだよ～。ぐすっ…。確かに遅刻したあたしが悪いけどさぁ…。ぐすっ。２時間ずっと廊下に水入ったバケツ持って立たされてたんだよ！！みんなあきれて…笑ってるし…ぐすっ」

莉央は思いっきり鼻をかんだ。

「あのさ…。目の前で泣かれると飯まずくなるんだけど…」

そう言って莉央の目の前で昼食をとっているのは五十嵐魁人（いがらしかいと）。高校１年生で莉央の幼馴染。走り高跳びの成績は全国１位。その他スポーツなら何でもできる運動神経抜群な男。

「魁人のバカ！！ふつう慰めるでしょ！！」

魁人はみそ汁を飲みながら言う。

「自らバカさアピールしてどうすんだ、お前」

莉央は魁人の言葉にピクッと反応し、箸をおいた。

「だって…あたしは所詮バカだもん。そんなの分かってるし…。なのに…なんであたしみたいなのがこんな学校にいるんだろう…」

魁人はみそ汁を飲む手を止め、莉央を見た。

莉央と魁人が通うこの月ヶ丘学園は各分野でトップクラスの実績、才能を持つ者が集う全寮制の超名門学校。その分野ごとにクラスが分かれており、運動能力を基準値とする《スポーツ科》、容姿や芸術感性を基準値とする《芸能科》、学力を基準値とする《特学科》、そして3つの科のいわば落ちこぼれが集まる《普通科》で構成されている。

莉央が中学3年生のとき、学園から普通科への推薦があった。
普通科は学園入試を受け、各科の基準値に満たなかった生徒の中から選ばれる科。
そういう中で普通科への特別待遇など例がなく、みんなが不振に思っていた。張本人である莉央はなおさらのこと。

そんな莉央の気持ちに気付いた魁人は莉央のためにスポーツ科の入試を受け、主席で合格し、特別待遇生として入学を決めた。魁人がともに入学するというだけでその時の莉央は安心。
だが、やはり莉央には場違いな学園で入学してからは莉央の不安は

日々募る一方だった。

「はぁ…」

莉央はため息をついた。

ボコッ

魁人が莉央の頭を叩いた。

「いったーい！！何すんのよ、魁人」

莉央が頬を膨らませると魁人が言った。

「こんな頭のかたいヤツばっかりの息詰まる学校で…。お前みたいなバカが1人いたら明るくなるとか思ったんじゃねぇの？」

「バカって…。何回も言わな…」

「だから、笑ってろよ。お前は」

魁人はそう言ってそっぽを向いた。

「魁人…」

莉央は魁人を見て微笑んだ。

昼食をとり、莉央と魁人は教室に向かうため廊下を歩いていた。

「ふぁぁ…。次、ずっと筋トレかぁ」

魁人はあくびをしながら言った。

「スポーツ科は大変だね。ずっとトレーニングだし」

「人の心配してる場合かよ」

「ハハハハハ…。次、古典なんだけどさ、もうワケ分かんない。反語って何!?みたいな!!」

「・・・」

「あっ。今、またバカって思ったでしょ?思ったよね」

「別に…」

「むぎゃー!!なんで運動神経抜群のくせにあたしより頭もいいのよ!!」

莉央は魁人をポカポカ叩こうとするが魁人に頭を押さえられ、手が届かない。

「むかつくー!!」

「はぁ…」

「莉ー央ちゃん！！」

いきなり誰かが莉央に抱きついた。

「きゃあ！！…って翼くん？」

「今日もカワイイね、莉央ちゃん」

結城翼（ゆうきつばさ）。莉央と同じ普通科の男の子。極度の女好き。

入学当初は芸能科にいたが、初対面で莉央を気に入り普通科へ転科した。

芸能科にいただけあって整った容姿をもっており、女子なら誰でも振り返ってしまうほど。

「翼くん。・・・あの・・・」

「何？」

ニコニコ笑う翼に怖い顔つきの魁人が言った。

「はなしてやれよ」

「なんで？」

翼はたくらむような笑顔で魁人に聞く。

「結城…」

魁人の機嫌がどんどん悪くなる。

魁人はどうも翼くんが苦手らしい。

「か…魁人！！落ち着いて！！翼くんもはなして！！」

「えぇ…。莉央ちゃん冷たいなぁ」

笑いながらそう言う翼が前を見ると、彼の顔から一瞬その笑顔が消えた。

「翼くん？」

「オレ、職員室に呼ばれてんだった。莉央ちゃん、また教室でね」

翼はにっこり笑ってそう言い、来た道を引き返して行った。

「翼くん…。どうしたんだろう」

「相変わらず変なヤツだな」

「ははは…」

莉央と魁人が話していると前から集団がやってきた。

「やぁ、望月さん」

集団の先頭に立ち、莉央に話しかけてきたのは神宮寺玲央（じんぐうじれお）。

学園の生徒会長で、理事長の息子。

生徒会は各分野が偏りなく総合的に優れた者、つまりエリート中のエリートの集まり。

そのトップにたつ玲央はひときわ目立つが、その高貴な雰囲気から

一目おかれる存在なのだ。

「じ・・・神宮寺先輩！！こんにちは！！」

ペコリと頭を下げる莉央を見て玲央は微笑んだ。

「今日も元気だね」

「そ・・・そうですか？」

「可愛らしい望月さんの笑顔を見ると、僕も元気が出るよ」

顔が真っ赤になった莉央を玲央の後ろにいる生徒会の竜崎芽衣子（りゅうざきめいこ）が睨んでいた。

「か…可愛らしいって…あの…」

「顔真っ赤だよ？熱でもあるのかな？」

そう言って心配そうに莉央の額に触れようとする玲央の手を魁人が掴んだ。

「あぁ、五十嵐くん。こんにちは」

「俺たち教室に戻るんで失礼します」

そう言って魁人は莉央の手を引っ張った。

「ちょ…魁人！！じ…神宮寺先輩、失礼します！！」

魁人はまるで莉央を玲央から遠ざけるかのようにスタスタと歩いていった。

「玲央さま。いいんですか？五十嵐魁人のあの態度…。」

芽衣子は魁人への腹立たしさをあらわにして言った。

「あぁ、いいよ」

「キミって本当に五十嵐くんに嫌われてるよね、玲央」

玲央と対等の立場で話しているのは生徒会副会長、西園寺拓真。

「拓真…」

「恐いよー。その顔。お願いだからその顔でこっち見ないでよ」

「…。五十嵐くんが僕を嫌うのは仕方ないよ」

拓真を無視して玲央は笑顔で2人の去ったあとを見つめた。

「魁人！！あの態度は失礼・・・」

「・・・」

魁人の顔色が悪いのをみて、莉央は口をつぐんだ。

魁人のその顔は入学式のあのときの顔と似ていたから……。

『うわぁ！！お城だ！！』

学園の門の前に立ち、莉央は叫んだ。

『お前、反応が恥ずかしいんだけど…』

あきれたように魁人が言った。

『クスクスクス…』

莉央と魁人はその笑い声に振り返った。

『あぁ…。ごめんね、つい…』

魁人はその男を見た瞬間、凍りついた。

『僕は学園生徒会長の神宮寺です』

『あっ…初めまして！！望月莉央です！！』

頭を下げる莉央を玲央は愛おしそうに見ていた。

『キミが望月さんか…。特例の普通科推薦の…』

『あの…えーと…。何かの間違いかと思うんですけど…。一応そうです』

『間違いなんかじゃないよ』

『え？』

玲央は笑い、魁人のほうを見た。

『キミは…』

『五十嵐魁人』

魁人は不機嫌そうに言った。

『あぁ…スポーツ科の…』

玲央は魁人の顔を見て微笑んだ。

『玲央。時間だよ』

拓真が玲央を呼びに来た。

『新入生？』

『あぁ。望月莉央さん・・・と五十嵐魁人くん』

『この子が？あっ僕は西園寺拓真。学園副会長だよ』

『初めまして！！望月莉央です』

『五十嵐君も初めまして』

『・・・初めまして』

魁人は変わらない顔色で答えた。

玲央は申し訳なさそうな顔をして言う。

『ごめんね。式典の準備に行かなくちゃいけないみたいだ。粗末なあいさつになっちゃったけど・・・以後よろしくね』

玲央と拓真がいなくなり、莉央は魁人に話しかけた。

『噂どおり生徒会の人って綺麗な人だね。特に神宮寺先輩は・・・って聞いてる!?』

『俺・・・あいつ苦手』

そう言った魁人の顔色はとても悪かった。

それから玲央は莉央に会うたびに優しく話しかけてくれた。

「いい人なのに…」

魁人と別れ、教室に戻った莉央は1人つぶやいた。

『…時は満ちた』

―あなたは誰?―

『目覚めるのだ』

―何を言っているの？―

『そなたの役目を…果たすのだ…』

莉央は目を覚ました。
学校が終わり、寮に帰って眠っていたのだ。

「また…。今日はよく見るなぁ…」

莉央は記憶の始まりから、よく同じ夢を見ていた。
巫女装束を着た、月明かりと似た美しい銀色の長い髪の女の人の後ろ姿…。
昔はぼんやりとしか見えなかったけど、最近では声まではっきり聞こえる。

「うーん…。気持ちいい…」

莉央は眠れそうもなく、寮をでて学校の庭を夜風にあたりながら散策していた。

すると、前から誰かが歩いてきた。

「やばっ…。消灯後の外出は罰則が！！」

莉央が隠れようとするとその人影が口を開いた。

「…莉央？」

「え？」

その声の主は月明かりに照らされ、魁人だと分かった。

「なんだ、魁人かぁ…」

「なんだってなんだよ」

「生徒会の人かと思った」

「ビビり」

「違うもん！！」

莉央はそう言ってから笑った。

「どうした？」

「いや…。なんか魁人とこんな風に落ち着いたところで話すのって施設にいたとき以来だなぁと思って…」

「そうか？」

「うん。やっぱり落ち着く」

にっこり笑う莉央を魁人は見つめた。

「0時まわったな」

魁人は腕時計を見て言った。

「え？」

「《誕生日》、おめでとう」

魁人はいつもの無愛想な顔で言った。

「覚えてたんだ？」

「…。お前にとっては今日を《誕生日》って呼ぶのはアレかもしんねぇけど…」

魁人は空を見ながら言った。

「ううん、嬉しい。ありがとう」

そう言って莉央も空を見上げた。

「ねぇ、魁人」

「ん？」

「今日はあたしたちが初めて会った日でしょ？」

「あぁ」

「今日、あの日と同じ満月だよ」

「あぁ…」

「キレイな月だね」

「…。莉央。俺…」

魁人が言葉を言いかけた時、暗闇で何かがうごめきだした。

「なんだ…あれ？」

魁人の言葉に莉央が振り返る。

暗闇でうごめく何かは異形の怪物に変化した。それはまさに《闇》でできているとしか言いようのないほどの憎悪の執念を辺りに散りばめていた。

「何…あれ？」

その《闇》を見た瞬間、莉央の頭を激しい痛みが襲った。

「おい…。これ、夢じゃねぇ…よな？」

目の前の光景に魁人は動揺を隠せない。

「莉央…。と…とにかく逃げ…」

言いかけた魁人が目にしたのは頭を抱え、苦しむ莉央の姿だった。

「いたい…。頭…割れる…」

莉央は地面に座り込んだ。

「おい…莉央！！」

怪物は2人に近づいてくる。近づくほどに莉央の痛みは増していた。

「いたい…。何…こ…れ…」

ドクン…

勢いよく跳ねた鼓動とともに莉央の世界がガラリと変わった。

『…時は満ちた』

―あなたは誰？―

『目覚めるのだ』

―何を言ってるの？―

『そなたの役目を果たすのだ…。そなたは…』

「大丈夫か！？莉央！！なんなんだよ…これ。マジでヤバ…」
怪物は莉央と魁人の目の前にきた。そして自分を構成している闇を噴射させ、その闇が莉央と魁人に降りかかろうとした。
その瞬間、まばゆい光がはなたれ、その闇がかき消された。
「グルルルルル…」
あまりの眩しさに怪物はうめき声をあげた。
「眩し…い。莉央！！だいじょう…？」
魁人がその光の中に見たのは、見覚えのある顔で巫女装束をまとう少女だった。
「莉…央？」
「グルルルルル…」
怪物はさっきよりも増して恐ろしいうめき声をあげ、少女にとびかかった。
「魁人、下がって！！」
少女の声はやはり莉央のものだった。
状況を飲み込めず立つつくす魁人を莉央は押しのけた。
そして怪物が再び噴射した闇に莉央はただ1人抵抗することなく飲

み込まれた。

「莉央…？莉央！！」

莉央が闇に飲み込まれたのを見て魁人が叫んだ。

「グルルルルル…」

怪物は満足そうにしていたが、いきなり苦しみ始めた。

すると、闇の中から莉央の声が響いた。

「悲しき憎悪の魂よ、我が光にその魂を宿し…我が言葉（ことのは）に従え」

莉央の放った言葉により、その怪物に月の紋様が浮かんだ。

「月華降臨（げっかこうりん）、暗影滅却（あんえいめっきゃく）！！」

その紋様はまばゆい光を放ち、闇とともにはじけた。

そしてその中から莉央が現れた。

「消え…た？」

魁人は目の前の光景に驚いていた。

莉央の髪や服がもとに戻り、それと同時に莉央は倒れかけた。

「莉央！！」

魁人は倒れかけた莉央を支えた。

「莉央…なんだよな？」

放心状態の莉央は何も反応しない。

「玲央さま」

生徒会の本郷蒼馬（ほんごうそうま）が生徒会室へきた。

生徒会役員は夜中だというのに生徒会室に集合し、着席していた。

「分かってるよ、本郷」

「失礼いたしました」

「玲央さま、いかがなさいましょう」

芽衣子が口を開いた。

「しばらくは様子をみるさ。すぐに君たちの手を借りることになる」

すると拓真が立ち上がり、玲央にお辞儀をした。

「玲央のために」

それに続いて芽衣子、蒼馬、その他の生徒会役員がお辞儀をした。

「玲央さまのために…」

玲央は微笑を浮かべ、満月を見上げる。

「これはまだ始まりだよ、莉央。いや…ルナ」

「やっと見つけた。ルナの能力(ちから)…」

莉央と魁人を見つめる金色の影が1つ…。

「今のは…何？」

『そなたの役目を果たすのだ…』

震える手を押さえながら、莉央は思い出していた。

『そなたは…私と同じ光の魂を宿した…《月の姫》なのだから・・・』

月下の契り

「望月莉央。…普通科！？本当にこいつが…？拍子抜けだな」

学生簿を見ながら、男は言った。

『魁人、下がって！！』

―違…う―

『悲しき憎悪の魂よ、我が光にその魂を宿し…我が言葉に従え』

―やめ…て―

『月華降臨、暗影滅却！！』

「やめてー！！」

莉央は叫び、起き上がった。

「はぁ…はぁ…はぁ…。夢…？いや…違う」

莉央は昨日の出来事を思い返しては自問自答をくりかえしていた。

「あの力は…何？」

莉央は自分の手を見つめた。

莉央は朝食をとらずに学校へ行き、普段生徒が立ち寄らない校舎裏の温室に向かった。
莉央は人に会いたくなかった。特に魁人には……。
温室は美しい花であふれていてとても心落ち着く場所、莉央のお気に入りの場所でもあった。

「キレイ…」

莉央は後ろに人の気配を感じ、振り返った。

「神宮寺先輩」

珍しく玲央の周りには誰もいなかった。

「温室に人がいるなんて珍しいね」

玲央の優しい顔を見ると莉央はどこか懐かしさを感じた。

「ここ落ち着くんでモヤモヤしたときは来るんです」

「じゃあ今は何かモヤモヤしてるってこと？」

「あっ…えっと…」

莉央が返事に困っているのに気づき、玲央は笑った。

「今日は望月さんの誕生日…だよね？」

「えっ。なんで知ってるんですか？」

「学生簿でチラッと見覚えがあったから…。おめでとう」

玲央は優しい笑顔でそう言った。

その美しい顔に莉央は見とれてしまう。

「望月さん？」

「…あっ！！ありがとうございます」

莉央はいつもの笑顔でお辞儀をした。

「じゃあ、僕はそろそろ行かなきゃ…」

「あの…神宮寺先輩！！ここに用事があったんじゃ…？」

「望月さんの姿が見えたから少し寄っただけだよ。…またね」

そう言って玲央は温室から出て行った。

「やっぱり…いい人だ」

莉央はそう言って温室を出た。

温室を出て莉央はしばらく校舎裏を散策していた。

「望月莉央。特例の普通科学生」

「え？」

自分のことを話すその声に莉央は反応した。
振り返ると声の主は目の前にいた。
朝日に輝く金色の髪。
背丈は莉央より少し高いくらい。
ブレザーの色からして特学科の生徒のようだが、ブレザーの下に指定のＹシャツではなく、パーカーを着ている。
一言で言うと見た目は小学生みたいだった。

「あ…あの…」

「学力、芸術感性、運動技能、どれも最低レベル。顔もまぁまぁだな」

その男は学生簿か何かを見ているわけでもなく、全てを知っているかのように莉央を見ながら言った。

「あの！！」

莉央は声を張り上げた。

「何？俺がまだ喋ってるんだけど」

その男はつった目で莉央を見た。

「えっと…その…誰ですか？」

莉央のその言葉に辺りの雰囲気が凍りついた。

「…。お前、この俺を知らないのか？」

「あの…どっかで会ったことありましったっけ？」

その言葉に男はいっそう不機嫌になり、莉央に背を向け歩きだした。

「あの…！！」

莉央は男を呼びとめた。

「お前、情報よりも遥かにバカ女」

男は莉央にそう言い放ち、去って行った。

「…何、あの人？」

莉央はさっきの男のことを考えながら教室に行った。

「誰なんだろう…。特学科なのは確かだけど…」

「莉ー央ちゃん」

教室に入ると翼が背後から莉央に抱きついた。

「翼くん…。挨拶代わりに抱きつかないで！！どこの外人！？」

莉央は自分を睨む教室内の女子の視線を避けながら翼から離れた。

「あんまりそっけなくされるともっと本気になっちゃうんだよねぇ、オレ」

翼はニコニコしながら言うが、莉央は冗談と分かっていながらも真っ赤になってしまう。

「何？照れてる？カワイイ～」

「もう！！からかわないでよ！！」

莉央と翼がじゃれあうと、翼のファンはより一層冷たい視線を莉央に送る。

「望月さん。また翼くんと…」

「ちょっと気に入られてるからって…」

「遊ばれてるのに気付いてないのかしら」

「翼くんが本気なわけないじゃない」

次々に翼ファンは言う。

「あの～…聞こえてるんですけど…。てか別にあたしは翼くんなんか…」

「そこのカワイイ子たち～。そんな顔してグチグチ言ってると…」

莉央の言葉をさえぎり、翼は笑って言った。

「キレイな顔が台無しだよ」

その笑顔はいつもと違ってとても冷たく、ファンの子たちは凍りついていた。

「翼くん…？」

「いやぁ、女の子ってのはカワイイよねぇ。嫉妬しちゃって～」

さっきの冷たい笑顔が嘘かのように、いつものからかうような笑顔で翼は言った。

莉央はそれを見て少しホッとした。

「それが狙いであたしにかまってるでしょ！？」

莉央は頬をふくらませて言った。

「まっさか～。莉央ちゃんは格別。勢いで転科しちゃうくらいだし～」

翼の冗談じみた発言に頬を赤らめてしまう莉央はバレないようにうつむいてから言った。

「からかってるでしょ…」

「あはは～。あっ莉央ちゃん。このあいだの成績でてるらしいよ」

莉央と翼はこのあいだ行われた特学科と普通科の合同テストの成績開示を見に行った。
このテストで成績がよかった普通科の生徒は特学科へ、逆に成績が悪かった特学科の生徒は普通科へ転科することになる。
重大な行事の１つではあるが莉央にはほとんど関係ない話だ。

「ゲッ…」

自分の成績を見て思わず莉央は声をもらした。

「うわぁ…そんな感じの成績だね～」

翼は莉央の成績にありのままコメントした。

「ヤバすぎる…」

うなだれる莉央を慰めるように翼が言う。

「大丈夫大丈夫。この学園、特別待遇性は単位とか関係ないんだし」

「そういう問題じゃないよ～」

「ほら、オレも似たよーなもんだし」

翼は笑顔で自分の成績を指さす。

「だって翼くんはもともと芸能科じゃん。いざとなれば…また芸能科に…」

「はいはい、泣かない泣かない。特学科じゃないんだから学力試験の成績なんかで落ち込む必要なし」

翼は莉央の頭をポンポン叩いた。

「はぁ…。特学科と同じ試験なんてあたしに解けるわけないんだよ！！うん！！」

「確かに特学科も平均点低いしね～。０点がいっぱいあっても大丈夫だよ」

開き直る莉央に翼が言った。

「さりげなく点数言わないでくれないかな…？」

「怒らない、怒らない。おっ、やっぱりトップくんは満点だね～」

「トップくん？」

莉央は翼に聞き返す。

「ほら毎回満点で１位とってるでしょ？特学科の首席は」

「そうなの！？」

「莉央ちゃん…。いつも成績開示で何見てんの？」

「自分の成績と向き合ってます」

翼は莉央に背をむけ、しばらく肩を揺らしてから再び莉央に向き直

った。

「えっと…ぶふっ！！ごめ…笑いが…」

「翼くん、怒るよ」

「ごめんごめん。ほらアイツだよ」

翼が指さした人物を見て莉央は目を丸くした。

「東条奎雅（とうじょうけいが）。特学科の誇る歴代？1の秀才」

翼が指し示した人物、それは莉央が朝会った金髪の男。

「あの人が…特学科の首席！？」

「見た目はバカそうなんだけどねぇ。莉央ちゃんより」

「翼くん！！」

「冗談、冗談」

笑う翼に莉央は尋ねた。

「ねぇ…やっぱりそんな人を知らないってバカ？」

「まぁ普通科と特学科はこんな感じで交流多いし、普通は知ってるからね～」

莉央は朝の自分の発言を思い返した。

『えっと…その…誰ですか？』

奎雅は莉央の視線に気づき、莉央を鋭い目つきで睨んだ。

「あちゃぁ…」

莉央は自分の朝のバカな発言を後悔した。

翼はそんな莉央と奎雅を交互に見てつぶやいた。

「へぇ…。あいつまだ何もしてねぇんだ…？」

午前の授業が終わり、昼食時間になった。
いつもは魁人と食堂で昼食をとる莉央だが今日は教室にいた。
莉央はしばらく考えてから立ち上がった。
すると、目の前に莉央がちょうど会いに行こうとしていた人物が現れた。

「魁人…」

莉央と魁人は屋上に行った。

「魁人…お昼食べた？」

「いや」

魁人は莉央の顔を見ずに言った。

「食べなきゃダメじゃん」

「お前こそ」

莉央と魁人は目をあわせなかった。
莉央も魁人もかける言葉が見つからず、沈黙は続いた。
しばらくして先に沈黙を破ったのは莉央だった。

「ねぇ、魁人」

「何？」

「あたしのこと化け物だって思ってるでしょ？」

莉央の言葉に驚き、魁人は莉央の目を見た。

「何言って…」

「あたしはそう思うよ。自分のこと」

「莉央。俺は…」

莉央は自分の手をギュッと握り締め、笑った。

「だから、もう無理にあたしと関わらなくていいよ。関わらないほうがいいし、魁人だって関わりたくもないでしょ」

「違う！！俺は…」

「今までありがとね」

莉央は魁人の言葉をさえぎり、そう言い放って屋上をでた。

「…。目に涙ためて笑うんじゃねぇよ…」

魁人は唇をかみしめた。

「ケンカ…かな？」

その声に魁人の顔つきがこわばる。

屋上と校舎をつなぐ塔の影からその男は現れた。

「神宮寺……玲央」

「盗み聞きになっちゃうのかな？ごめんね」

「別に」

急いで屋上をでようとする魁人に玲央は言った。

「今日、望月さんの誕生日なんだってね？」

魁人はその言葉に反応し、振り向いた。

「…あんた知ってるだろ？今日があいつにとって本当は何の日なのか」

「どういう意味かな？」
微笑む玲王を魁人はにらんだ。
「キミは初めて会ったときから僕のことをそういう目で見るね」
魁人は玲王のほうへ歩み寄り、玲央の頬をかすめて塔をなぐった。
「痛いだろう？コンクリートは殴らないほうがいい」
魁人は玲央を睨みつけ、屋上を出て行った。
その姿を見つめる玲央は微かに笑っていた。

『そなたの魂は泣いている…』
―また…。あなたは誰なんですか？―
『そなたは《月の姫》として覚醒したのだ。もう元には戻れぬ…』
―月の姫…？覚醒…？何を…言ってるの？―
『そなたにできることはただ１つ……』
真夜中、莉央は昨日と同じように目を覚ました。
「あたしにできること…」

「グルルルルル…」

目を覚ました莉央は微かに昨日の怪物と同じうめき声を聞いた。
そのうめき声は昨日の記憶を呼び起こす。

『悲しき憎悪の魂よ』

―あたしはあの怪物と同じ？―

『我が光にその魂を宿し…』

―違う―

『我が言葉に従え』

―違う？何が？―

『月華降臨、暗影滅却』

―何も…変わらないじゃない―

莉央はベッドを飛び出した。

莉央は昨日と同じ場所にいた。
やはり、そこには昨日と同じようにうごめく闇があった。

「あたしがやらなきゃ…」

そう言って莉央は闇に立ち向かおうとした。

「あれ？」

莉央の身体には何も起こらない。

「どうし…て？」

怪物は莉央のほうへ歩み寄る。

「昨日は勝手に…。なんで…？」

莉央は動揺していた。

しかし、怪物はそんなことなどお構いなしに莉央にせまり、体内の闇を噴射した。

「いやぁ！！」

その瞬間、誰かが莉央の身体を持ち上げ、闇の噴射をよけた。

「バカが…」

莉央を抱える人物がもらした声に莉央は耳を疑う。

「魁…人」

月明かりで魁人の顔がはっきりと莉央の視界に映る。

「なん…で？」

莉央は驚きのあまり上手く声を発せられない。

「怖いくせに…1人でくるんじゃねぇよ」

魁人は莉央の頭をなでた。

「魁人…。魁人だって怖いくせに…。あたしのことだって…」

「お前は…莉央は化け物じゃない」

莉央は目を見開いた。

「…え？」

「確かに昨日のお前は普通じゃない。でも…」

魁人はその優しい目で莉央を見つめて言った。

「俺がずっと見てきたお前はバカでマヌケで…。すぐ落ち込んで、怒って、泣いて…。結局また笑って…。めちゃくちゃ感情を表に出すやつで…。そんなヤツが化け物なんて、笑える冗談あるかよ？」

「魁…人」

「お前がどんな力を持ってたって…。そういうお前は…。俺が一緒

にいたいと思うお前は変わらずここにいるだろ？」

莉央の目から涙が溢れた。

「お前じゃなきゃ、あれは倒せねぇんだ。お前があれと1人で向き合うのが怖いっていうなら俺が一緒にいてやる。絶対そばにいる」

魁人は優しく微笑んで莉央の頭にポンッと手をのせた。

「だから、泣くな」

その手から伝わる温もりに莉央はホッとし、目を閉じた。

―あたしは化け物じゃない―

『覚悟はできたのだな？』

―あたしはあたしなんだ―

『ならば、願うのだ。そなたの望む力の降臨を…。そなたにできることはただ1つ…』

「『闇を照らすこと』」

莉央の身体（からだ）からまばゆい光が生まれ、莉央の姿は昨日と同じ美しい巫女のものとなった。

「じゃあ、ちょっと行ってくる」

莉央は魁人にそう笑いかけ、怪物の頭上を天高く舞い上がり、言葉をつむいだ。

「悲しき憎悪の魂よ、我が光にその魂を宿し…我が言葉に従え。月華降臨、暗影滅却！！」

闇にうごめく怪物に月の紋様が浮かぶ。
紋様はまばゆい光を放ち、まるで闇を包み込むかのようにしてはじけ、怪物とともに消えた。

闇夜に輝く美しい巫女装束…。
それはまるで孤独な月のよう…。

着地すると莉央の髪や服は元に戻った。

「莉央」

莉央と魁人は見つめあった。

「魁人、ありが…」

魁人は急に目を見開き叫んだ。

「莉央、うしろ！！」

莉央が振り返るとそこには新たな闇がうごめきだしていた。
莉央は再び覚醒しようとした。

その時…。

「破壊雷獣（ブレイクサンダービースト）」

莉央が念じるより早く声が静かに響いた。

そして間もなく、莉央の頬をイナズマのようなものがかすめ、その闇の中の怪物にぶつかった。

それは激しく火花を打ち、怪物とともに消えた。

「怪物が…消えた？」

魁人は驚いていた。

「今の…雷…？」

莉央は自分の頬を流れる血をふいた。

「運のいいやつ。零落（ナレノハテ）と一緒に葬ってやろうと思ったのに・・・」

莉央と魁人はその声のほうへ向きなおった。

その声の主を見た莉央は驚きに目を丸くした。

「東条奎雅…」

昨日と同様、生徒会室には役員が全員集まっていた。

「姫を守る騎士(ナイト)となるか…」

玲央は静まり返る室内で学生簿を見ながら微笑をこぼす。

「…姫を葬る死神となるか」

「昨日のは見間違いじゃなかったみたいだな、バカ女」

雷電を放った男の顔が月明かりで浮かび上がる。

「東条…奎雅…」

記憶の触発

「東条…奎雅…」

莉央はその手に電光を宿す男の名を口にした。

「へぇ。俺のこと誰かから聞いたのか？」

奎雅はそう言って魁人を見た。

「隣にいるのは…五十嵐魁人か。首席入学の特別待遇性。走り高跳びの実績は過去2回の全国大会優勝。その他…」

奎雅はやはり全てを知っているかのように魁人を見ながら話す。

「バカ女の近くにいるヤツにしては大物だな」

勝手に話し続ける奎雅を無視して魁人は莉央に尋ねた。

「莉央、こいつ誰？」

「か…魁人！！」

莉央は急いで魁人の口をふさいだが、奎雅の耳にはすでに届いていた。

「…ふははっ…ははははは！！！！」

奎雅は狂ったように笑い出した。

「バカ女の隣にいるだけあって…お前もバカ男か！！特学科首席、東条奎雅。聞いたことあるだろ！？」

「ない」

「魁人！！」

奎雅の怒りはその電光の火花の音で伝わった。

「それよりお前のその能力(ちから)はなんだよ？」

魁人の言葉を聞き、奎雅は鼻を鳴らして手をかざし、天空に雷電を放った。

「天空落雷(スカイライトニング)」

静まり返る空気の中で奎雅の声が響き、莉央の真後ろにあった木に落雷した。

木は激しい電撃を受け、無残な姿へと変わり果てた。

偶然の落雷ではない。

天空に放たれた雷電が放電し、威力を増して地上の一点に放射されたのだ。

「この威力…」

魁人は原形をとどめないその木を見て言葉をもらした。

「雷電を自由自在に操る。これが俺の能力(ちから)で、零落(ナレノハテ)を倒す術だ。」

「ナレノ…？」

莉央は奎雅の発した謎の単語に反応した。

「お前…まさかルナのくせに零落（ナレノハテ）も知らないのか？」

「ルナ…？」

莉央には奎雅の発するその単語の意味が分からなかった。

「おいおい…。何も知らないのかよ？」

奎雅はため息をつき、寮のほうへ向きなおった。

「と…東条くん！！」

奎雅は振り返って言った。

「今日はあきれすぎて気落ちしたから何もしない。でも…」

奎雅は莉央をすごい憎悪の目で睨む。

「そのルナの能力（ちから）は絶対に破壊してみせる」

そう言って奎雅は寮へ戻って行った。

「ルナの…能力（ちから）？」

莉央は学校でもずっと奎雅と奎雅の放った言葉のことを考えていた。
零落（ナレノハテ）という闇から生まれる怪物のこと、莉央の能力（ちから）のこと…。
その全てを知る奎雅。そして彼の雷電の能力（ちから）…。

「どうなってんのよ〜…」

莉央は机に顔をうずめた。

「ほんと、どうなってんだろうねぇ…これ」

耳元で響く翼の声に莉央は顔をあげた。

「わっ！！翼くん！？あっ！！」

翼が持っていたのは莉央の小テストの答案だった。

「全部うめてあるのに何もあってないって…。逆にすごいね、これ」

翼は笑いながら言った。

「か…返してよ！！なんで翼くんが持ってんの！？」

「これ持って教諭室来いっていう伝言。あれ？…ほっぺ、どしたの？」

翼は莉央の頬の傷に目をやった。

「えっ…あ…転んで…」

莉央はぎこちなく答えた。

「へぇ。どう転んだらそんなとこケガするんだろうね？」

翼は嘘を見抜いているかのように聞く。

「えっ…えぇっと…あっ！！時間ない！！教論室行かなきゃ！！」

莉央は翼から逃げるようにして教室を出て行った。

「カワイイなぁ、莉央ちゃんは。本当…」

翼の顔から笑顔が消えた。

「憎たらしいくらいに…」

「やっぱ目立つかなぁ…」

莉央は奎雅の雷撃によるかすり傷をさわりながら小走りで教論室に向かっていた。

「望月さん？」

名前を呼ばれ、莉央は振り返った。

「神宮寺先輩！！お…おはようございます！！」

「クスクス…。おはよう。ん？頬の傷は…」

「こけたんです！！」

莉央は玲央が言い終える前に答えた。

玲央の周りには生徒会役員がいつものように付き添っていて女性役員…特に芽衣子は莉央を睨んでいた。

「あらま～。女の子の顔に傷なんて…早く治るといいね」

拓真もいつもの調子で言う。

「ご心配ありがとうございます」

玲央は莉央に笑いかける。

「ところで、五十嵐くんとは仲直りできた？」

「え？」

「昨日、偶然僕も屋上にいて…。ちょっと見てしまったものだから…ごめんね？」

申し訳なさそうに言う玲央に莉央は首をふった。

「い…いえ！！場所が場所ですし！！謝らないでください！！それに…」

莉央はすごく嬉しそうに微笑んで言った。

「魁人とも仲直りできましたし…」

玲央は莉央の笑顔をさみしそうな目で見ていた。

「先輩？」

玲央の手が莉央の頬に触れた。

「すごく五十嵐くんのことを大切に思っているんだね」

「え？」

玲央の手から伝わる温もりに莉央の頬が赤らむ。

「望月さんは…感情が分かりやすいね？」

莉央の鼓動は玲央の優しい声音に耐え切れなくなった。

「せ…先輩！！あの…あたし、時間なくて…し…失礼します！！」

莉央は振り払うようにして玲央のもとを去った。

「玲央さま。あれは無礼すぎますわ！！」

「芽衣子」

芽衣子の発言に冷たく玲央が答えた。

「…申し訳ありません」

芽衣子は唇をかみしめた。

「竜崎…」

蒼馬は芽衣子を辛そうに見る。

「玲央。カリカリしすぎだよ」

拓真が玲央をなだめる。

「莉央…」

莉央は教論室につき、扉を開けた。

すると目の前には莉央がずっと考えていた人の顔があった。

「と…東条くん」

「バカ女か」

「どうしてここに…」

「俺が教論室にいたら悪いのか？どうせお前はバカすぎて説教で呼ばれたんだろう？」

莉央は言い返せなかった。

そして奎雅が教論室から出ようと一歩踏み出すと莉央は身構えた。

それに気付いた奎雅は莉央に言った。

「何もしない」

「え？」

「少なくともお前が人間の姿をしてるあいだはな」

奎雅は莉央の横を通り過ぎながら続けた。

「俺が狙ってるのはあくまでルナの能力(ちから)だ」

「あの…ルナの能力(ちから)って…！！」

奎雅は莉央を無視して教室へ帰った。

「…はぁ」

いつものように莉央は食堂で昼食をとる。

莉央は奎雅の発言を思い返せば思い返すほど分からなくなり、思わずため息をついた。

「あのなぁ…」

莉央の目の前で昼食をとる魁人は眉間にしわをよせて言う。

「飯食ってるときにため息つくなって言ってんだろ！！」

「何よー！！いつもいつも飯、飯、飯って…。どんだけ食い意地は

ってんのよ！！」

「それ…使い方あってんのか？」

「うるさい！！」

莉央は頬をふくらませながらご飯を食べた。

「莉央」

「何？」

莉央は怒った顔で魁人を見た。

「今日は外にでるなよ」

意外な言葉に莉央は目を丸くした。

「なんで！？もし、あの零落（ナレノハテ）？ってのが現れたら…」

「現れても東条がいる」

「でも…」

「東条の能力（ちから）見ただろ？お前よりずっと強いよ、あれ。それに東条が狙ってんのはお前だし。お前があの電撃くらってもビクともしないなら別だけどな」

魁人の言葉はもっともだった。

「…分かった」

莉央はうなずき、ご飯を食べた。

「グルルルルル…」

莉央はそのうめき声を聞き、目覚めた。

「零落(ナレノハテ)…現れたんだ…」

ベッドから出ようとして魁人の言葉が胸に引っ掛かる。

『今日は外に出るな』

「でも…」

『そなたにできることはただ1つ・・・』

莉央は夢の女の言葉を思い出した。

「うん。そうだよね。あたしにできることをしなきゃ…。ごめん、魁人」

莉央はベッドを飛び出した。

莉央は零落(ナレノハテ)の声のする方へ走った。
莉央は走りながら力の降臨を念じ、覚醒した。
零落(ナレノハテ)の声が校舎の屋上から響く。
莉央は闇夜に装束をひらめかせ、屋上まで舞い上がった。
屋上に着地すると、そこには5体の零落(ナレノハテ)が暗闇にうごめいていた。

「これは…」

5体一気に相手ができるほど莉央は戦いに慣れていない。
そうこうしているうちに莉央は零落(ナレノハテ)に囲まれた。

「ヤバい！！囲まれた…」

すべての零落(ナレノハテ)が一斉に莉央に体内の闇を噴射しようとした。
そのとき、莉央は零落(ナレノハテ)の他に上空から殺気を感じ取った。

「天空落雷(スカイライトニング)」

声が響き、5つに分かれた激しい雷電が上空から放たれ、莉央以外の5体の零落(ナレノハテ)にぶつかる。
零落(ナレノハテ)は激しい火花とともに消えた。

「東条くん…」

暗闇から雷電の主が姿を見せた。

「こんな雑魚にてこずるなんて…。さすがのルナの能力(ちから)もお前みた

いなバカ女が持ってれば何の役にも立たないな」
そう言って奎雅の手から火花がほとばしる。
「お前なんか一撃で…」
奎雅は莉央にその手を向けた。
莉央は奎雅が電撃を放つと思い、反応しようとした。
しかし、バランスをくずした莉央は屋上から足をすべらせた。
「おい！！」
奎雅の声が響く中、莉央は落ちていった。
「嘘！？ど…どうしよっ！！身動きとれな…」
莉央は目をつぶった。
「…ったく」
突如現れた男はそこにあった長い棒を即座につかみ、華麗にとびあがって落ちてくる莉央を捕まえた。
「え…？」
男は莉央を抱えたまま、ふわりと着地した。
莉央はおそるおそる目をあけた。
「生き…てる？」

「当たり前だろーが」

男は莉央の頭を小突いた。

「いった！！…か…魁人！！なんで！？」

莉央を救った男、それは魁人だった。

「俺の言うことなんか聞かねぇだろうと思って、来てみたら…。こんな格好で落ちて身動きとれるわけねぇだろ！！」

「し…仕方ないじゃん！！勝手にこんな格好になるんだから！！」

「めちゃくちゃ空中に跳びあがれるくせに…空中を歩いたりとかはできねぇのかよ」

「できないわよ！！ていうか、それどころじゃ…」

「ふん。助かってたか…」

奎雅は雷雲に乗り、莉央たちのもとへ着地した。

「魁人、下がってて」

魁人は莉央の言葉に従った。

莉央と奎雅の視線が重なり、それを合図に莉央と奎雅はそれぞれ走り出した。

「雷電放射（サンダーエマネーション）！！」

奎雅はどんどん莉央に向かって雷電を放つ。

「避けるしか脳がないのか！？」

莉央は零落（ナレノハテ）との戦い方しか知らない。

「東条くんに零落（ナレノハテ）の滅却術を使ったって意味ないし…。どうしよう…」

莉央は雷電を避けるしかできない。

「それで…俺に勝てるとでも思っているのか！？」

そう言って奎雅は莉央に雷電を放った。

莉央は石につまづいて倒れ、その雷電を避けられない。

「嘘…だろ？おい！！」

奎雅が莉央のほうへ駆けながら叫んだ。

「莉央！！」

それと同様に魁人も莉央のもとへ走る。

しかし2人が着くよりも早く、雷電は莉央にぶつかった。

「きゃあああ！！」

その強大な電撃に耐え切れず、莉央は叫び声をあげた。

「莉央！！」

雷電がはじけて倒れる莉央のもとへ魁人がたどり着いた。

「大丈夫か！？莉央！！」

莉央はゆっくりと目を開けた。

「大丈…夫。…！！東条…くん？」

莉央の目に映ったのは頭を抱え、しゃがみこむ奎雅の姿だった。

「くそっ…。こんなときに…思い出すな…！！」

莉央はボロボロの身体で奎雅のもとに歩み寄る。

「莉央！！」

魁人は莉央の手をつかみ、引きとめた。

「魁人…はなして」

真剣な莉央の目を見て、魁人はゆっくりとその手をはなした。

「くる…な！！」

自分に近づく莉央を見て奎雅は叫び、雷電の宿る手を莉央にかざした。

「くるなー！！」

莉央は奎雅の手をつかんだ。
すると奎雅の手から火花が消え、２人の触れ合った手からまばゆい光が生まれた。
その光は２人を包み込む…。

『お願い！！やめて…いや…いやあああああ！！』

―何…これ―

『いいか？絶対にでてくるな。いいって言うまで声も出すな』

―これは…記憶…？―

『兄ちゃんが守ってやる』

奎雅は莉央の手を振り払った。

「今の…」

莉央が言葉を発すると同時に奎雅は逃げるようにしてその場を去った。

玲央は生徒会室から夜空の月を眺めていた。

「かつての友の背負う悲しき運命（さだめ）…。どうやって照らす？…ルナ」

莉央と奎雅…
２人のあいだに生まれた光の中で莉央が見たのは…。
真っ暗な魂…―憎悪の記憶―。

憎悪の落雷

『奎吾、奎雅。隠れてなさい。いいわね？お母さんが来るまで絶対にでてきちゃダメ』

―母さんはあわてて僕たちをクローゼットの中に隠した―

『兄ちゃん。どうしたの？あの黒い服着た人たちは誰？』

『奎雅、静かに。声を出しちゃいけない』

―兄ちゃんはそう言って僕の手を握った。でも、兄ちゃんの手は震えてた。それからすぐに大きな音が響いて兄ちゃんはもっと震えてた―

『本当です！！』

―母さんの声が聞こえた。母さんが部屋にやってきたんだ。僕はやっとクローゼットから出してもらえるんだと思った。そして僕はクローゼットの戸の隙間から部屋の中をのぞいた―

『嘘をついちゃいけませんねぇ。東条家にこれだけしかお金がない？ありえないでしょう』

―黒い服の人におもちゃをつきつけられて母さんは怖がってた。もう1人の黒い服の人のそばには父さんがいた。でも父さんは赤いドロッとした水に全身がぬれていた―

『本当にこれだけなんです！！本当です！！お願い！！やめて…い

や…いやあああああ！！』

―さっきと同じ大きな音が響いた。そして母さんも父さんと同じように
ドロッとした赤い水をたらして眠ってしまった―

『ひっ』

―僕は思わず声を出しちゃったんだ。そしたら黒い服の男たちはこっちに近づいてきた。それを見た兄ちゃんは僕をクローゼットにあった服を全部使って隠したんだ―

『兄ちゃ…』

『いいか？絶対にでてくるな。いいって言うまで声も出すな』

『兄ちゃん…？』

『兄ちゃんが守ってやる』

―兄ちゃんはそう言って笑った。そして僕の顔も服で隠した。震える手で…。クローゼットが開くと兄ちゃんは引っ張り出された。兄ちゃんのおかげで僕は見つからなかった―

『他にまだ誰かいるかい？』

『…いない』

―兄ちゃんの声だった。兄ちゃんは嘘をついた―

『本当だね？』

―見えないけど、兄ちゃんがうなずいたのが分かった―

『じゃあ、おじさんたちがお父さんとお母さんのところに連れて行ってあげよう』

―僕はなんでか分からないけど、急いでクローゼットを出ようとしたんだ。そしたら、大きな音が鳴った。最後まで震えてた兄ちゃんの手…。その手の震えはその瞬間、止まったんだ―

「莉央」

魁人の声に莉央はハッとした。

「ボーっとしてんじゃねぇよ」

莉央と魁人は3体の零落（ナレノハテ）と対峙していた。

「ごめん」

「…行くぞ」

そう言って魁人は走りこみ、長い棒を使って高く跳びあがった。華麗に舞いあがった魁人に向かって3体の零落（ナレノハテ）が集まる。

「月華降臨、暗影滅却！！」

莉央はその一瞬の隙をついて術をはなった。

3体の零落(ナレノハテ)に浮かび上がった月の紋様はまばゆい光を放つ。
そして零落(ナレノハテ)はその光とともにはじけ、消えた。

「終わったな」

莉央と魁人は連携して戦うようになった。

「東条のこと考えてたのか？」

「うん…」

あの日…莉央が奎雅の記憶の断片にふれてから、1週間がたつ。
奎雅はあれ以来、学校にも零落(ナレノハテ)の前にも姿を現さなかった。

「寮に引きこもって出てこないって…特学科のヤツも言ってただろ？」

莉央は自分が見た奎雅の記憶を魁人に話さなかった。
魁人もあえて聞こうとはしなかった。

「お前が落ち込んでも仕方ねぇよ」

魁人は莉央の頭を軽く叩いた。

「そうだけど…」

「帰るぞ。…夜明けだ」

莉央はうかない顔つきのまま寮に帰った。

「何度来ても…異空間…」

莉央がいるのは特学科棟特学科最優秀クラスF組の前…。
学科ごとに分かれた制服のせいで莉央は特学科棟で目立っていた。
特学科の生徒は普通科の制服を着た莉央をジロジロ見ている。

「はぁ…やっぱり魁人つれてくればよかった…」

「今日も来たんだね」

莉央がつぶやいているとF組から2人の男が笑顔で出てきた。
莉央は1週間、魁人と一緒に特学科F組に通いつめていたので顔を覚えられていた。

「あれ？スポーツ科のヤツがいないな。1人で来たのか？」

「あ…えっと…1人です」

魁人がいないと分かると、男たちの態度が変わった。

「東条なら今日も休みだ。僕たちは忙しいからこれで失礼するよ」

「ちょっと…あの…！！」

莉央が男の袖をつかむと男はものすごい勢いでその手を振りほどいた。

「え？」

2人の男はクラスのドアをピシャリと閉めた。
立ちつくす莉央は微かに聞こえる室内の会話を聞いた。

「普通科のバカに触られちゃったよ」

「バカがうつる」

「あれ東条の知り合いなのか？あんなのが知りあいなんて正気じゃないよな」

「天才はやっぱり違うんじゃない？アハハ…」

莉央は目の前にある教室をすごく遠くに感じた。

『ヤダ！莉央ちゃんとは遊ばない！！』

『だって、莉央ちゃんは施設の子だから一緒に遊んじゃダメってママが言ってたもん』

『カイト…。ここにいたらトモダチになっちゃいけないの？』

『は？何それ』

『ユージくんもアミちゃんもリオがここにいるからトモダチになりたくないんだって』

『…』

『リオ、トモダチほしい・・・。みんなトモダチといると楽しそう』

『バーカ』

『え？』

『いっぱいいるだろ？ここにいるみんながお前の友達だ！！』

『みんなはカゾクでしょ？』

『…。莉央はみんなといると楽しいだろ？』

『うん！！みんなといるとポカポカする！！』

『だろ？じゃあ、俺たちは友達だ！家族でもある！分かったら遊ぶぞ！！』

「…央。莉央！！」

莉央はハッとした。

「な…何！？」

「お前…それ食べれんの？」

莉央はそう言われて自分の昼食の皿を見た。

「何これ！？」

皿の中はしょうゆでいっぱいになり、中に何があったのかも分からない。

莉央の持っていたしょうゆの入れ物は空になっていた。

「食べれないじゃん！！これ！！えーっ！！」

「しょうゆかけながらボーッとしてっから…」

絶叫する莉央に魁人は冷静な声音で言った。

「はひ～…。今日は昼食抜きか…」

ガックリする莉央を見て魁人は箸を置いた。

「俺、もういらないから食えよ」

そう言って魁人はまだ半分以上残っている自分の昼食を莉央に渡した。

「い…いいよ！！魁人のほうがスポーツ科の授業で疲れてるんだし！！」

魁人は頬杖をついた。

「あんなんで疲れるかよ…。お前こそ、食わねぇと小せぇまんまだぞ」

「なにー！？」

魁人はそっぽを向いた。

『じゃあ、俺たちは友達だ』

「クスクス…」

莉央は笑った。

「なんだよ？」

「ううん。ありがとね、魁人」

「別にいいよ、それくらい」

「ご飯のことじゃなくって！！」

「は？」

莉央は窓を見た。

「東条くんの心を開く方法…なんとなく分かったんだ」

「東条さん」

特学科寮の奎雅の部屋にF組の男が訪れた。
しかし、奎雅の反応はない。
「あの…普通科の女子が東条さんに手紙持ってきてますけど…。もちろん、いらないですよね!?すいません、捨てておきます」
奎雅の反応をうかがうかのように男は言った。
「待て」
部屋から奎雅の声がしてドアが開いた。
「え…」
男は驚いていた。
「なんだ?俺が出てきたらおかしいか?」
「い…いや」
「手紙」
奎雅は男の目の前に手を出した。
「えっ!?あ…はい…」
男はさらに驚いたが急いで奎雅に手紙を渡して言った。
「その女、普通科のくせにずっと東条さんに会いに来てて…。今日

なんかついに寮にまで押し掛けてきて！！特学科首席の東条さんに手紙なんて…普通科のヤツって本当バカですよね！？」

男はまた奎雅の機嫌をうかがいながら言う。

「じゃ…じゃあ、俺行きますね」

そう言って男は笑顔で自分の部屋に戻って行った。

「…。ほんと…バカじゃねーの？あいつ」

奎雅は普通科の女が書いたその手紙をじっと見つめていた。

「本当に来るのか、アイツ？」

夜中、零落（ナレノハテ）の出現に備え、莉央と魁人は外にいた。

「分かんない。でも…」

そう言った莉央の目には月が美しく映っていた。

冷たい風が吹く。

まるで闇が光を飲み込んでいくような…冷たい風。

「莉央」

その声と同時、莉央は光に包まれ、美しい巫女装束に身を包んだ。

目の前にいるのは5体の零落(ナレノハテ)。
いつものように連携して2人は戦った。
魁人がおびきよせた5体の零落(ナレノハテ)を莉央が術で滅そうと踏み出す。
その時、莉央の後ろでうめき声が響いた。
「莉央、うしろ！！」
莉央は振り返ったが零落(ナレノハテ)はすでに体内の闇を外界に溢れさせていた。
莉央の片足が闇に引きずり込まれそうになる。
「ヤバい…！！魁人！！」
莉央を闇の中に引き込もうとする1体の零落(ナレノハテ)と魁人に集まる5体の零落(ナレノハテ)。
6体がほぼ同時に2人に攻撃をしかけた。
「莉央ー！！」
「きゃあ…！！」
「天空落雷(スカイライトニング)、破壊雷獣(ブレイクサンダービースト)」
天空から5つに分岐した雷電が魁人のまわりに降りかかり、電気を帯びた金色の獣が莉央を飛び越え、闇を食らった。
「これは…東条の能力(ちから)」
魁人は自分を助けた雷撃を見て言った。
莉央は獣が飛び込んできた方を振り向いた。

すると月明かりに金色の髪を揺らし、奎雅は2人のもとに姿を見せた。

「東条くん！！来てくれたんだね？」

喜ぶ莉央とは裏腹に奎雅の目は憎悪で満ちていた。

「東条く…」

「同情のつもりか？」

その言葉に莉央は目を丸くした。

「え…？」

「あんな記憶のぞいて、俺のことをかわいそうだと思ったか？」

「ちょっと待って、東条くん」

奎雅は莉央の手紙を取り出した。

「こんなもの…。漏電爆破（ショートサーキットブラスト）」

奎雅の手から漏れた電気が爆発し、その手紙は瞬時に塵と化した。

「東条…お前…！！」

魁人は奎雅にとびかかろうとしたが、奎雅は全身に電気をまとっていて近づくことはできない。

「かわいそうだと思うなら…。同情するなら、今すぐその能力(ちから)を破壊させろよ」

奎雅は手を空にかざした。

「今ここで消えろ…。天空落雷(スカイライトニング)!!」

憎悪に満ちた魂が落雷する。
その矛先を莉央に向けて…。

月華差す魂

場所は生徒会室。

「玲央さま。今日が決着かと」

蒼馬が玲央のもとへ報告にきた。

「そっか…」

「玲央さまはどうなるとお考えですか？」

芽衣子が玲央に尋ねた。

玲央はチェスの駒を動かした。

「さぁ…」

「全部分かってるんでしょ、その発言は」

拓真は笑った。

「どうなっても結果は1つだけだよ」

「はぁ…はぁ…」

月明かりに照らされる巫女装束を着た少女の姿はボロボロだった。

「莉央！！横だ！！」

「雷電放射（サンダーエマネーション）！！」

莉央は魁人のおかげでギリギリその攻撃をかわした。

「はぁ…はぁ…いたっ…」

莉央は足をくじいていた。

莉央と奎雅が戦い始めて何時間が経つだろうか…。

真っ暗だった空がだんだんと明るくなっていく。

1度も奎雅に攻撃できない莉央と何度も莉央に攻撃を仕掛ける奎雅。

運がいいことに電撃は莉央にまだ命中しておらず、身体をかすめる程度だった。

「攻撃しないで…。勝てると思っているのか！？」

「きゃあ！！」

電撃が莉央の手首をかすめる。かすめただけでも相当な痛みだった。

「どうしよう…。こっちも攻撃しないと…」

莉央は足の痛みをこらえて走り出した。

「いつまで逃げるつもりだ！？天空落雷（スカイライトニング）！！」

放たれた雷電が分岐し、空からいたるところに落雷する。

「あたしが使えるのは零落(ナレノハテ)の滅却術だけ…」

莉央は攻撃をよけながら必死に考えた。

「暗影滅却っていうのは…暗い影をとりはらうってこと…」

奎雅は逃げる莉央を追いかける。

「暗い影っていうのは…たぶん、憎しみや悲しみで光を隠してできた影のこと…！！だったら今の奎雅くんにも使えるかも！！」

閃いた莉央は足元にせまった電撃をよけるために飛びあがった。

「でも、術を放つには東条くんの攻撃を止めなきゃ…。それが1番難しいことなんだけど！！」

着地した莉央をにぶい痛みが襲う。

「このままじゃ…あいつヤバいだろ…」

魁人は痛みをこらえる莉央を見てつぶやいた。

「くそっ…。俺には…何もできない」

魁人は無力な自分に腹立たしさを感じていた。

「上手く使いこなせないくせに…そんなにルナの能力(ちから)がおしいか！

？」

雷電を放ちながら奎雅は言った。

「あたしは…この能力(ちから)のこと全然知らないし…おしくもない！！…でも」

莉央は走り続けた。

「あたしにこの能力(ちから)をくれた夢の中の女の人と約束したから！！あたしにできることをするって…。闇を照らすって！！」

奎雅はその言葉に反応した。

「お前！！ルナと対話したのか？」

莉央は奎雅の言葉に耳を傾けるよりも足の痛みに感覚が集中した。

「いたい！！」

すでに放たれた電撃が莉央にふりかかろうとした。

しかし、天空から降ってきたもう一つの雷電が莉央に降りかかろうとした雷電にぶつかり、莉央の目前で消滅した。

「…え？」

莉央はそれを見て違和感を覚えた。

莉央は急いで立ち上がり、また走り出した。

奎雅は再び雷電を放つ。
攻撃をうければうけるほど、莉央の疑問は確信に変わっていった。
「もしかしたら…。もう、やってみるしかない！！」
莉央はそう言って最後に放たれた雷電をよけ、奎雅に向かって走りだした。
「とうとう諦めたのか！？」
そう言って奎雅は莉央に手をかざすが、その手から雷電が放たれる気配がない。
―東条くんへ―
「くそっ…。なんで…」
―あたし、東条くんに1つだけお願い事があるんです―
「あんな手紙…！！くそー！！」
奎雅は莉央に向けていない方の手で頭を押さえた。
「東条くん！ごめん！…悲しき憎悪の魂よ、我が光にその魂を宿し…我が言葉に従え」

奎雅の胸元に月の紋様が浮かび上がる。

「な…っ」

「月華降臨、暗影滅却！！」

紋様から美しい光があふれ、奎雅の視界は真っ白になった。

『兄ちゃん！！たんじょーびおめでとー！！』

『これは・・・？』

『兄ちゃんの絵！！がんばって書いたんだ！！』

『おっ。これは奎吾の似顔絵か？さすが奎雅、上手だなぁ』

『あら、本当。特徴をとらえてるわね。奎雅は本当に記憶力がいいのね』

『本当に上手だ。ありがとう、奎雅。お前は本当に優しいなぁ』

「兄…ちゃん」

「東条くん！！」

目を開けた奎雅の目に映ったのは制服をきた、髪の短い普通の女の子の姿だった。

「バカ…女」

「大丈夫！？」

「お前が術を使ったんだろ」

「ご…ごめん。でも、よかった」

本当に安心している莉央を奎雅はジッと見つめた。

「…ん？」

「お前に滅却される零落（ナレノハテ）はあんな気分なんだろうな…」

奎雅は地面に横たわったまま空を見た。

「俺は…瞬間記憶能力を持ってる…」

「え？…瞬間…？」

「瞬間記憶能力…。俺は五感で得たものを全て瞬時に記憶することができる」

『望月莉央。特例の普通科学生。学力、芸術感性、運動技能、どれも最低レベル。』

『五十嵐魁人か。首席入学の特別待遇性。走り高跳びの実績は過去2回の全国大会優勝…』

「だから…あんなに覚えてたんだ…。すごい…」

「便利な能力だと思うだろ？」

うなずく莉央を見て奎雅は言った。

「でも、俺は1度覚えたことは決して忘れない。たとえ幼いころの記憶でも、残酷な記憶でも…。現実と錯覚してしまうくらい鮮明に記憶して、そのまま一生忘れない。記憶が少しも薄れることはない」

奎雅は一息ついてから冷静に話を続けた。

「お前が見た俺の記憶は俺が小学校に入ったばかりのころの記憶だ」

「そんな小さい頃の記憶だったの…？」

「あの日まで俺には父親も母親も・・・5歳年上の兄もいた」

奎雅は記憶をたどるようにして言った。

「あの頃、父の会社がうまく行っていたこともあって俺は裕福な家庭で育っていた。でも、会社の成功の裏には数え切れない多くの犠牲があった。そしてあの日、父にリストラされた数人の男が家にきた。あいつらは部屋に入るとまず父を殺した。母は急いで俺と兄を隠した。そして男たちは母を見つけ、金を要求した。金を渡せば助かると思った母は家にあった金をすべて渡した。あいつらは最初か

ら誰も生かしておくつもりなんかなかったのに…。そして母は殺され、俺の代わりに兄も殺された。男たちがいなくなってクローゼットから出てきた俺は…無様にただ1人血の海の中に立っていた」

莉央は自分が見た記憶と奎雅の言葉を照らし合わせていた。

「その後、俺の記憶で男たちはすぐに捕まった。…けど…」

奎雅は目を閉じた。

「部屋に響く銃声も…むせかえる血のにおいも…倒れる家族の姿も…兄の震える手も。全部、今目の前で起きてる現実のように…覚えてる」

「東条くん…」

奎雅は目を開け、身体を起こした。

「俺が生まれてきた理由とお前の能力(ちから)はつながってる」

「え…?」

「俺なんかいなかったら…兄は死ななかった。兄を身代わりにした…こんな最悪な俺を生み出したお前の能力(ちから)を破壊して…。そしたら死のうって…。ずっとそう思ってきたんだ」

莉央は奎雅の言っている言葉の意味が分からなかった。

「それはどういう…?」

「お前に勝てない。能力(ちから)も奪えない。そんな俺に残されたことは1つしかないよな？」

奎雅はそう言って笑い、全身を大量の電気でまとった。

「東条くん…何を…！！」

「耐電破壊雷術(ベアブレイクサンダースペルバンド)！！」

魁人が莉央を引っ張り、奎雅から遠ざけた。

奎雅を包む電気が火花を打ち、爆発的に放電した。

耐電体質でも耐えきれないほどの電流の巡りと威力だった。

「東条くん！！」

「くっ…あぁぁぁぁぁ！！！！！！」

莉央は魁人の手をふりほどいた。

「莉央！！」

「東条くん！！」

莉央は奎雅をむしばむ電流の渦に飛びこんだ。

「バカ…女！！覚醒…してない身体で…何…してんだ！！」

「きゃあぁぁぁ！！…で…電流を…とめてー！！」

しかし、電流の威力は上がっていく。

「東条くん！！きゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「俺はもう…いやなんだ…。解放…させてくれ！！邪魔をするな！！」

「バカ！！」

莉央は奎雅の手をつかんだ。

すると、記憶が流出したときと同じように美しい光があふれ、電流は瞬時に消えた。

「な…はなせ…っ」

「いや！！」

「バカ女！！」

「いやだよ…」

「じゃあ、お前は一生俺にあんな記憶抱えたままでいろっていうのか？どれだけ辛いかお前に分かるのか！？お前が俺と変わってくれるのか！？」

「それは…できないけど…。でも、いやだよ。東条くんがいなくなるなんて…ヤダ！！そんな悲しいこと…言わないで！！」

莉央は奎雅の手を強く握った。

「バカ…女…」

「…東条くんの記憶は忘れたいって思うのは当然なくらい辛いものだよ…。でも…」

莉央はまっすぐな瞳を奎雅に向けた。

「大切な家族のことを忘れたいって思ってほしくない」

莉央は涙をこらえるような声で言った。

「東条くんの記憶の中には、家族との大切な思い出がいっぱいあるでしょ？」

「莉央…」

魁人は莉央の言葉に反応した。

「忘れるってことは悲しいことだけじゃなくて…楽しい気持ちも嬉しい気持ちも、愛おしく思う気持ちも全部なくなっちゃうってことなんだよ？」

莉央の声は震えていた。

「全部忘れたら、家族のこと何1つ思い出せなくなって…大切な思いも全部消えて…何も残らないなんだよ…？」

魁人も奎雅も莉央を見つめていた。

「悲しいって…辛いって思えるのは…東条くんの中に家族を変わらず愛おしく思う気持ちがあるからでしょ！？」

「…そんなこと…っ」

「その思いまで消えちゃったら…東条くんの優しい心はどこに置き場を見つけるの？」

奎雅はその言葉に目を丸くした。

「優しい…心…？俺が優しい…？」

「そうだよ。東条くんは本当はすごく優しい人でしょ？」

『お前は本当に優しいなぁ』

「バカか…お前。俺はお前を殺そうと…」

「ううん、違うよ」

莉央は首をふった。

「東条くんの攻撃があたしに命中したのはあたしが転んで本来避けられるはずの雷撃を避けられなかったときだけだった」

魁人は驚いていた。

「わざと命中しないようにしてた。ただ、あたしがドジで避けきれ

なくて電撃がかすったりはしたけど…。さっきだって倒れて雷撃を避けきれないあたしを見て、その雷撃に雷を落として消したでしょ？東条くんが本気であたしを殺そうとしてたら絶対にそんなミスはしない」

「都合のいい解釈だな」

「それだけじゃないよ」

莉央は話し続けた。

「今日…特学科に初めて1人で行ったんだ、あたし。そしたら…みんなあたしのこと冷たい目で見てた。あたしと喋ることもあたしに触れられることも本気で嫌がってた」

魁人は莉央の悲しそうな背中を見つめた。

「あんなすごい集団にいたら…それが当たり前の反応なのかもしれない」

奎雅は何も言わなかった。

「でも、東条くんは違った」

「え…？」

「あたしのことバカバカ言うけど、その声にはどこか温かみがあって…」

『お前、情報よりも遥かにバカ女』

『何もしない。少なくともお前が人間の姿をしてるあいだはな』

『嘘…だろ？おい！！』

「東条くんだけはあの集団の中にいても、こんなあたしを人間らしく見てくれてたんだって気付いた…」

莉央の目から涙が流れた。

「…そんな優しい心を持ってる東条くんが…あんな冷たい空間の中にいるのを考えたら…すごく悲しくて…」

莉央は奎雅の手をより強く握った。

「人より倍の苦しみを背負ってる東条くんが…。本来、誰よりも温もりが必要な東条くんが…なんであんな温かみのない場所に1人でいなきゃいけないんだろうって…」

莉央の溢れる涙は止まらなかった。

「東条くんは…もしかしたら家族が目の前からいなくなった日から…ずっと心休まる日はなかったんじゃないのかなって…」

奎雅はその言葉に目を見開いた。

『奎雅くん、今日からおばさんの家に住もうねぇ』

『お前、なんでわざわざ義兄さんの子なんか引き取ったんだ！？家計もやっとなんだぞ！？』

『何言ってるの？あの子を引き取ったら兄さんの財産が全部入るのよ！？』

『東条くん、また満点！？すごいなぁ』

『そうか？』

『うん！！東条くんは僕の自慢の友達だよ！！』

『あの記憶力ってせこいよなぁ。マジむかつく』

『そう言って、お前東条と仲いいじゃん』

『だってアイツ、先生のお気に入りだし。一緒にいれば内申書あがるんじゃね？』

『バーカ。んなわけねぇだろ！アハハ・・・』

「バカ…。なんでお前が泣いてるんだ…」

「ごめん…。泣きたいのは…東条くんのほうなのに…」

莉央は涙を急いで拭ったが拭っても拭っても涙は溢れるばかりだった。

奎雅はそんな莉央を見て言った。

「自分の過去から本当に解放されたかったなら、会えるかも分からないルナなんて待たずに自殺してでも記憶を消そうとしたはずだ…」

―東条くんへ―

「それでも俺が生きていた理由はきっと…探してたからなんだ」

―このあいだはごめんなさい―

「俺を引き取ってくれた親戚は俺を利用してた。…友達だと思ってたヤツはみんな、影では俺のことを嫌ってた」

―いきなり手紙なんて書いちゃって…迷惑かもしれないけど―

「優しい兄ちゃんがあんな震えた手でかばう価値が俺にあったのかなって…ずっと思ってた」

―あたし、東条くんに1つだけお願い事があるんです―

「俺は…ルナに…お前に会って、ただ…俺が生まれてきた価値を示してほしかったんだ…」

「え？」

莉央は赤くなった目を見開いた。

「お前は…こんな無様な俺に…まだあんな願い事をしてくれるか？」

―東条君、あたしと…―

莉央は優しく笑った。

「当たり前だよ」

―友達になってくれませんか？―

「あたしは東条くんと友達になりたい」

―奎雅、友達できたか？―

―友達なんていらないよ―

―何言ってんだ、奎雅―

―え？―

―友達はすごいよー―

―すごい？―

―一緒にいると心がポカポカするんだ―

―…何それ。兄ちゃん、意味分かんないよ―

「東条くん…？」

奎雅は顔を隠した。

「これは…別に泣いてるんじゃないからな。目が痛い…だけだから…」

莉央はそんな奎雅を見て微笑み、抱きしめた。

「うん。分かってる」

―なんでこいつはこんなに温かいんだろう…―

「目…いたい…」

―あぁ…そうか―

「ありがとう…莉央」

―兄ちゃん…俺やっと分かったよ…―

そして夜が明けた…。

「莉央、お前大丈夫なのかよ?」

莉央と魁人は食堂へ歩いていた。

「うん。この姿に戻ったら傷も全部消えてて…。でも、このまま東条くんの電撃の中に突っ込んじゃったからその時の電撃で少し麻痺してるけど…」

莉央は笑っていた。

「後先考えないで飛びこむからだろ」

魁人は莉央を軽く小突いた。

「えへへ…。あっ東条くん！！」

莉央は向こう側から歩いてくる奎雅のほうへ走った。

「今から昼食？」

「ま…まぁな」

奎雅はぎこちなく返事した。

「一緒に食べよ？」

莉央が笑顔でそう言うと奎雅の顔が真っ赤になった。

「東条くん？顔赤いよ？」

「う…うるさい！！」

「東条さんが普通科のヤツと喋ってる」

莉央と魁人、奎雅はその言葉に反応した。

「うそー。東条くん、どこか打ったんじゃない？」

「東条さんも変わり者だよなぁ、アハハ…」

「おい！！」

莉央と奎雅を見ながら話す特学科の生徒に文句を言おうとした魁人

を奎雅が止めた。

「東条…？」

「黙れ、バカどもが…」

その一言に辺りがざわついた。

「こいつにも俺にも言いたいことがあるなら直接言え。それから…」

奎雅は冷静な口調で言った。

「こいつをそんなにバカにしたいなら、俺に1度でも成績勝ってからにしろ」

奎雅はそう言って食堂に入って行った。

特学科の生徒は黙っていた。

莉央は奎雅を追いかけた。

「と…東条くん！！ありが…」

「礼は言うな」

「え？東条く…」

奎雅は莉央を見た。

「奎雅でいい」

「…？」

奎雅は顔を真っ赤にして言った。

「友達なんだろ？俺たちは」

奎雅はそっぽを向いた。

「…。うん！！」

莉央は笑った。

「ルナはうまく丸めこんだようですね」

「あの2人いいんですか？」

蒼馬と芽衣子が玲央に言った。

玲央は何も応えない。

「全部予想してたんだもんね」

拓真が笑いながら言う。

「すべてを破壊する雷術の守護星（しゅごぼし）…」

チェスの盤を見ながら玲央はつぶやいた。

「キミは…まだ遠いね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3307ba/

永久の誓言

2012年1月14日13時46分発行